

方向

第二一四号 一九九〇年五月十五日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

中国の詩人と仏教 (六)

1990.4.30. 原田憲雄

八、物語りの詩

二世紀の終わりに三世紀にかけて、という後漢の末、献帝の時代、『三国志』の曹操が権力を握ってみずから丞相になるその前後のことですが、五言で三五七句、一七八五字の長編物語詩がうまれるのです。「古詩、焦仲卿が妻の為の作」です。次のような序文がついています。

漢代末期の建安年間に廬江県の小役人である焦仲卿の妻の劉氏は、仲卿の母に追い出され、自分では再婚せぬと誓った。家の者が強いたので、投身自殺した。仲卿はこれを聞き、また庭の樹で縊死した。当時の人がこれをいたんで、この詩を作った。

「建安」は一九六一二二〇、「廬江県」はいまの安徽省にある町。劉氏の名は蘭芝。詩は、どこの家庭にもあり、今もなくなつてはいない嫁と姑の不和からおこる悲劇をえがきます。拙著『歴代名詩集』(カラー版・中国の詩集一〇。一九七二年)に「孔雀が：：」という題で、全部を訳したのですが、同書はすでに絶版になっていますので、主だったところだけ、次に書き抜いておきましょう。

孔雀が東と南に飛ぶ 五里ほどいってはふりかえる

十三 絹が織れました、十四 お裁縫の勉強、十五 笠篋(くご)ひいて、十六 詩経や書経も読め、十七

あなたの嫁になりました。気持はいつもつらかった。あなたは本庁づとめになった。仕事だいで情にかまけず、わたしはいつもお留守番、ふだんはめったにお目にもかかれぬ。鶏が鳴いたら織機（はた）につき、夜になっても休めない。三日に五疋は仕上げたが、親さまはぐずめとおっしゃる。織るのがぐずなわけではない、嫁のつとめがむつかしい。追い使いには堪えられず、これでは居ても仕方がない。どうぞ姑（かあ）さまにおっしゃって、しばらく里に帰らせて。

夫の役人これを聞き、座敷で母親にこういった。

わたしは不幸な人相でした。さいわいこんな妻ができ、若いうちから枕しとねを分け合うて、冥土へも連れ立つつもり。ふたりで仕えて二、三年、まだそんなに長くもならぬ。あれにはひねくれたところもない、それをなせつれないことを……

母は子の役人にいう。

つべこべといたいなんじゃ。この嫁は礼儀を知らん、やることは我がまま気まま。腹の立つのを包んでいたが、おまえは自まます通す気か。東隣にいい娘（こ）がいる、……母さんはおまえの嫁にするつもり。だからあいつは出すがいい、出しなされ留めてはならぬ。

役人は膝ますきいう、

すみません お母さま、いまもし妻をお出しなら、死ぬまでわたしはめとりませぬ。

母親はこれを聞き、椅子たたき大腹立ち。

親を親とも思わんで、なんで女房の肩を持つ。義理も人情も知らぬやつ、わたしは決して許しませぬ。

役人はなんにもいえず、おじぎして部屋にかえり、嫁にいきさつ言いかけて、胸つまり語りもならぬ。

わしがあんたを出すのではない、せつづくのがあの母さんじゃ。あんたはしばらく家に帰れ、わしは本庁に報告がある。長うはならぬ 帰ってくる、帰ればきつと迎えにゆく。だから気持をおちつけて、わしの言葉にそむくでないぞ。

役人に 嫁はいう。

ごたごたはもうよしましょう。さきの年うららの春に、実家(さと)を出てお宅に参り、お姑さまにおつかえし、振舞いに我がままがございましたか。昼も夜もせつせと仕事、つくづく苦勞にやつれました。それでも罪咎あるわけでなし、お仕えし通すつもりでした。ところがやっぱり追い出されます、なんでまた返ってこいとおっしゃるの。：：つまらぬわたしのつまらぬ物、後のかたお迎えするには足りませんが、残しておきます あげてください。今からはお目にかかるよすがもなし、でも時々慰めのお手紙を：：

鶏が鳴く 外が明るくなってくる、嫁は起きて化粧する。：：しとしとと足をはこべば、うつくしき世にまたとなし。座敷にはいって姑にあいきつ、姑は腹立ちとめどもない。：：

門を出て車に乗ったが、涙がおちる 千すじあまり。役人の馬がむこうから、嫁の車がこちらから、カツカツとえい ガラガラと、ぼったり会うた 道ばたで。馬から下りて 車にはいり、うなだれて さきやきあう。

わしは誓う あんたと別れるつもりはない、ほんのしばらく実家に帰っていておくれ。わしはこれから本庁に

ゆく、長うはならぬ 帰ってくる、天に誓う そむきはせぬ。

役人に 嫁がいう。

すみませんこまごまとしたお気づかい。そんなに思っていてくださるなら、長くはならぬあなたのお出で待ちましょう。あなた どうぞ 岩のようにね、わたしは葦(よし)になりましょう。葦は絢(の)うたら切れぬ縄、岩ならばころがることもないでしょう。わたしには 父と兄がいて、雷のようにおそろしい。わたしの気持は汲みすまい、いまから胸が煮えくりかえる。

手をあげていつまでもいたわりあい、ふたりの心はよりそうのだが…… さて門に入り座敷に上がる、立ち居ふるまい元気なし。母親は膝たたき、

わからんもんだね あんたが自分で帰ってくるとは。十三 おまえに機織り教え、十四 お裁縫、十五 箆篋ひいて、十六 礼儀お作法、十七 おまえを嫁にやる。結婚の誓いにそむきはしませぬと言うていたのに、おまえは これ いったい何の罪咎で、迎えもせぬのに帰ってきたか。

蘭芝は母にはずかしく

わたしはほんとは罪咎なんぞないのです。

……家に帰って十日そこそこ、県知事どのが仲人よこし、おっしゃるには「うちの三郎、スマートき世にまたとない。年はやっと 十八、九。話上手で秀才で……」

母親はむすめにいう、

お受けして 行ったらどうだね。

涙ぐんでむすめは答える。

わたしが帰るそのときに、役人のあのひとが ねんごろに、誓われました 別れはせぬと、いまその情義にそむいては、よくないことがおこりそう。お話しはことわりましょう、そしてほつぽつ考えさせて。

仲人に母親はいう。

貧乏ぐらしにこの娘、やっとやったのに帰ってきました。役人の嫁にもなれぬそんな子が、若さまにつり合いましょうか。広い世間 どうぞほかさまおさがしを、お申し越し、お受けするわけにはゆきませぬ。 仲人が去

(い) んで数日、おつきは郡の属官がおたのみに……

その口上「太守のお宅に、かくかくの若殿さまがおいでになって、婚礼の大儀をお結びしたい。わざわざわれらをつかわしてお宅に参上」

母は仲人におことわりする。……兄がこれを聞きつけて、くやしがり腹のうちむしゃくしゃ、つい口に出て妹にいう。

やる話が話しにあわぬ。さきの相手は小役人、こんどの相手は若殿さま。よさわるさ天地のちがい、おまえにとつては名譽なことじゃ。こんな殿御の嫁にならずに、往くさきどうするつもりかね。

蘭芝は見あげてこう答える。

理屈はほんとに兄さんのおっしゃる通り。家を出て夫につかえ、途中で兄さんのおうちに帰る。身のふりかた

は兄さんのお心のまま、とても勝手はできません。役人さまと約束はいたしましたでしたが、あのかたとはとうてい御縁がないのでしょうか。そんならば、お返事なさい、結婚もいたしましょう。

仲人は椅子をたち、「いやなにより」「さようしからば」。役所に帰り、太守にもうす。……太守はこれを開きおわり、心中、大いによるこんだ。曆くり、書物をしらべ、「この月中がいいようだ、星のめぐりもよくかない、上吉は三十日、今月はもう二十七日、諸君は婚礼の準備をたのむ」……母親がむすめにいう。

太守さまからお手紙がきたのだが、あしたおまえを迎えにいでなさる由。どうして衣裳をととのえないの、間に合わぬようなことではいけないよ。

むすめはだまって声もなく、ハンカチで口おさえ泣く。……朝のうちにスカート仕上げ、夕方までに上着を仕上げた。だんだんと日が暮れてくる、かなしくなつて外に出てしくしく泣く。

役人は女のことを聞きつけて、休みをとつて帰ってくる。もう二、三丁というところで、疲れた馬がいなかった。嫁は聞きなれた馬の声に、くつ突きかけ迎えに出た。しょんぼりとながめると、はたしてあの人がやって来る。手をあげて馬の鞍まで、ああと嘆く、心がいたむ。

あなたとお別れしてからは、人間のこと、わかりませぬ。やっぱり願ひ通りにゆきません、でもあなたにはおわかりになりますまい。わたしには生みの父母がいるのです、無理じいします。その上、弟や兄までが、よその人の申し込み、わたしに受けよと申します。あなたが帰っていらしても今さら何を望めましょう。

役人は嫁にいう。

おめでとう あんたはご出世なさるんだ。岩は四角でぶあつくて、千年たつてもそのままさ。葦は一時（いつとき）つなぐ縄、朝から晩までもてばよい。あんたは日ましにおえらがた、わしはひとりで冥土にゆくさ。

役人に 嫁がいう。

まあ なんとということおっしゃるの。おんなじように無理じいされていきますのに、あなたがそうなら わたしもそうよ。冥土へいって会いましょう、今のお言葉 お間違いのないように。

手をとつて 道でわかれて、それぞれの家に帰った。……

役人は家に帰って、座敷に上がり母親にいう。

……わたしは今まっ暗です、お母さんをひとりぼっちでのごします。いけないことはありませんが、神様を怨まぬように願います。南山の石より久しいお命を、足腰まっすぐお丈夫で……

母親これを聞きつけて、涙は声とともに落ちる。

……ならぬならぬ 嫁のために死ぬなんて 地位の上下で見かえるような薄情者め。東どなりのよい娘、しつとりとこの町きつてのあでやかさ。母さんはおまえの嫁にするつもり、ええええ もう 今日のうちにも。

役人はおじぎをして返り、がらんとしたへやでつくづくなげく。……

その日 牛鳴き 馬嘶き、花嫁は暮屋にはいる。だんだんと暮れてきて。ひっそりと人も静まる。

わたしの命は今日絶えて、屍とどめ 魂（たま）は去る。

裙（もすそ）とり くつ脱いで、身を跳らせて池にとびこむ。

役人はこのこと聞いて、長の別れと心に知り、さまようて樹のもとを見、東南の枝に首をつる。

二つの家は合葬しようということになり、合葬した 華山のほとり。：：枝と枝たがいに覆い、葉と葉とはたがいに交じり、中に二ひきの鳥がすみ、鳴く声きけば鴛鴦（おしどり）だった。：：

さて 後の世の皆さまよ、気をつけなされ お忘れなさるな。（以上）

この詩は、作者がわからず、事件の直後に作られたとする説があり、後の六朝時代の作だとする説があり、また仏教文学の影響から生まれたとする説があり、それを否定する説がありで、中国でも学者のあいだで論争されたようです。事件の後あまり遠くない時期におおよそが作られ、それから二、三百年のあいだに部分的に加除修正されて現形になった、というのがほぼ今日の定説です。「仏教文学の影響」という点は、なお通説とはなっていないようですが、賛成してよいと思います。天下国家にかかわらぬ下級官吏や庶民の家庭内のごたごたをこまかに語る習慣はそれまでの中国にはまったくなく、仏教の譬喩譚が入って、語り方さえたくみならそうしたのも人前に出せることを、中国人も知ったのでしよう。

神々や英雄が出てこないのが西洋の叙事詩（*Epic*）の概念にあてはまりません。しかし、蘭芝はつましくやさしい女性だが、姑や夫に対して、筋道のたたぬことについては毅然として自らを主張し、言葉の表裏を十二分に使いこなします。考えようによっては、一種の女性英雄です。劉向（*前漢*）に『列女伝』という中国で典型とされる女性たちの伝記がありますが、蘭芝は、それらとは違った新しいタイプのよう感じられます。

歌人、大塚五朗 (五)

1930.5.1. 原田憲雄

小学校教員時代 (二)

一九一八年(つづき)五郎、二十一歳。

七月、萩原松子と結婚する。このとき五郎は福島県石城郡上遠野村尋常小学校の、松子は、二十歳で、同県伊達郡川俣尋常高等小学校の、訓導であったので、休暇以外はひきつづき別居の状態である。

一九一九年 五郎、二十二歳。歌集『山原』はほぼ制作時順に作品を排列するようだが、日付のないものが多いので正確なところはわからない。以下の年次割り当ては推測である。

早春賦

われ病む

浅春の木原けぶりて霧小雨降りわびしき朝けなるかも

竹林に落ち陽かかりて時久し心はここに極らんとす

幾久し病みて臥へこやれば青空も仰がずいつか春さりにけり

菰を焼く煙ながれてこの朝はわれに寂しき思ひわきけり

ここにいま目覚めながら松風を聞くわびしらのわが姿かも

夕されば風さへ細り淋しきをわが胸はまたいたみいづるか

青々と麦の畠の色かなし雲雀の巢をばみつけたるかも

山川は悲しき色に澄むものか泣かじとこそは見てゐたりけれ

一すちに枯草山を登りきて疲れはしるく陽に酔ひにけり

ひろげもつ椿の葉竝へはなみこもごもに青さたへて太陽（ひ）にむかひ居り

けさやかに光かもしてさ青なりその青き葉の地をおほひけり

ゆらゆらに吹き藤（ぬ）れさやぐ椿の葉その上に小さき陽もゆれにけり

（山原 二一七）

一九二〇年 五郎、二十三歳。

山 居 雑 詠

われ師範学校を卒業するや山間の小村に職を得て生活すること二年、その間親しき者と離れ、なつかしき者と距りて朝夕の寂しきまた極まれり。

世を遠くここの山処の春淺し梅は咲けりと告げやらんかも

春まだき山野の風の寒ければうごきはいまだ芽をたたみたり

幾山河へだて住まはせ年経たり朝夕（あさよ）の嘆きいたづらならず

岩代の八重山かげに春またむ春さりくれば逢ふと告げ来し

湯の嶽の頂臚に寒き雪みえて夕山かげに凧あぐる子等

冬の夜の酒の匂ひは寂しけれ傷みはてたるわが心かも

おほろかに空は来ればかなしもよ枇杷の白花陽にひらき来る

夕波のここにつめたく寄りあつつ河原蓬の乱れ明るし

瀬戸物の触れ合ふ音のさむさむし厨に残る夕明りかも

山と山せまれる間に村小さく時雨を寒むみひそまりにけり

青白く匂へる枇杷の花寒し夕べの庭に風おさまりぬへ「お」は原文のまま

うす苦き冬の日向に身を寄せてせんすべもなき事を思へり

もちの樹の葉がひに寒き夕みぞれ降りこもりつつ女（ひと）の恋ほしき

かすかなる川の遠音に聞きあかず今朝は寢覚の心澄みたり

一本の枇杷の花咲く味気なさわが恋ふ女（ひと）は遥かなるかも（山原 一八一六）

一九二一年 五郎、二十三歳。

別 離

われ病む。みとりに妻来らんとのたよりあれど、なかなか来らず。

いつの日かわがよろこびのかへり来む病む身に寒き冬日向かも

身を寄せてわづかに安さ思ほゆれ草場はかなき陽の光かも

ほのぼのと熱おさまりてものたゆし外の面ゆたかに日は闌けるつつへ「お」は原文のまま

夕づく陽障子に赤しなかなかに来ることおそき妻まぢかねつ

病癒えて妻再びかへらんとす

従順しく今は別れむきまわけてうべなふ女（ひと）に涙わくべしや

片寄りて凍る大沼（おほぬ）の水青み泣かゆとこそは見交はしにけり

別れ来て帰へらう道の星寒むみ乗るにたへんやゆきおそきとろ

あたたかき人の呼吸（いき）さへ思ほゆれ遠竝めにして町の灯の見ゆ

しばたたくまつげに寒さ通ひ来て早瀬の水の夕明りかも

秀へほのゆらぎひそかなれども竹藪のひとり見る目に耐へがてぬかもへ「藪」の原文は竹かんむり

しつとりと月にぬれたる外套をぬがむとはして心傷めり へ山原 二六一三

以上で歌集『山原』の「福島在住時代―その一―大正十年以前」はおわる。

この年、四月、福島県伊達郡掛田尋常小学校に転勤し、十月十五日、長男朗（あきら）が生まれる。その間の事情を『山原』の「巻末手記」にいう。

三年目の春、私は漸く伊達の方に帰ることが出来た。そして貧しい乍らも妻と一家を構へ長男朗をも挙げた。小学校の教師生活といふものに殆ど病的といつてもよい位の憊らなきを持つてはゐたものの、この時代は割合種かな日を送つてゐたやうに思はれる。掛田文化協会などといふものを作つて大いに先覚者ぶつた若い氣持などもなつかしく思ひ出される。

掛田文化協会は、町の青年二十人くらいを集め、読書会や短歌会をやっていたようである。

一九二二年 五郎、二十五歳。

『山原』の「福島在住時代―その二―自大正十一年至大正十三年」がこの年から始まる。

小 島

枯れ寂びて見るに明るき葦原の群生さわだて通る雨かも

水の如く陽かげとほりて細竹の青竹篁はのびのよろしさ

冬溜れし河原の石のつめたきにあつれてはなくいしたたきの鳥

いつの日ゆか庭樹の松に朝毎を来鳴く鳥ありて冬あたたかし

庭の樹に来て鳴く鳥の声きくと心ねもごろになりてゐにけり

夕されば来て鳴く鳥を待ちわぶる寂しき癖となりて待ちわぶ

庭の樹の松の小枝(きえだ)に鳴きあがり鳴きおり冬の雀が一羽

舞ひ下りて一羽の雀地に鳴けばいよいよ寂し冬の日向は

朝の陽の照りのとほしさ庭べにこぼれ松葉のうら寒きかも

夕さびて妻がりかへる小松原松原道に木を伐れる音

松原のにはひしみみに流るるやその松原に木を伐れる音

松原の夕べ深き人はゐて木を伐りいそぐ聞けばかなしき

冬をはれて輝き深き青竹のその篁に雀こもらうへ「う」は原文のまま

こもりつつ鳴く音明るき雀子に冬の陽ざしのたださしにけり

こもり鳴く雀の声をおりおりは吹きも乱して風はあるなり
（山原 三〇四）

掛田小学校から、同じ郡の伊達崎にある分校に転動したのは、たぶんこの年の七月であろう。「山原」「巻末手記」の前引の文に続けて、つぎのようにいう。

しかしそれも長くは続かなかつた。ふとした事件が原因で転任を命ぜられ、妻も亦小学校に奉職していた関係上、私は再び家庭を離れなければならなかつた。そして阿武隈川に程近い伊達崎という村に半年、不平不満の日を送つた。その間ともすれば乱れ勝な私の氣持を引立て慰めてくれた人に蓬田芳浪君がある。今福島県の浪江町に牧師を勤めてゐるが、今に変わらぬ友情を寄せてくれる事を心から感謝してゐるのである。この時代が即ち福島在住時代その二であつて、割合歌作にもいそしんだ時代である。

事件というのは、松子夫人の説明によると「毎月いろいろの本を福島から取り寄せていたので、社会主義の危険人物と思われ、不意転職」という罰を受けた」のだそうである。そういえば、この前後に社会主義者が、協会という名の団体を作つて組織を広げようとしており、すこしおくれるが、宮沢賢治の羅須地人協会も特高に狙われていたという。わたしの知る限りでの先生は、いかなる社会主義とも関わりがありそうには見えなかつたが、読書家を危険視する風潮は、第二次大戦中にもあつたから、第一次世界戦後のこのころの保守的な教育界でのこととして不思議ではない。

蓬田芳浪の本名は「吉次郎」、それ以外はわからない。

ひょうたんの話

1990.5.7.

原 田 慶

「ひょうたんから駒が出るいうて喜ばれますにゃ、この頃はまたひょうたんも人気があるんでっせ、そやさかいみやげ物屋にもよう出てます」

亀岡から来たKさんは、玄関に腰を掛けて、思いつくままに話す。主人と軍隊で一緒だったという人である。

「憲雄さんは元気にしてはりますか。わたしも年をとって腰が痛うてかありませんにゃ。今日は天神さんの日いですさかい、いっぺん行ってみようと思て出てきたんですわ。店ぼっかり見て、何も買わへんです、くたびれて腰が痛うて」

主人は出かけていたけれど、せつかくなので、まあお茶でもと、掛けてもらった。

「前に寄せてもろて、十何年…… だいぶんになりますなあ」

忘れていたが、そういえばずいぶん久し振り。ずっとお元気でしたか、とたずねると、

「わたしはひょうたんをやつてましたんです。ひょうたんで知らはらしませんか。秀吉の千成瓢箪やら言いますやろ、縁起もんで、愛瓢家も多いんです」

「知ってます。うちにも小さいのが一つありましたけどどこへやったかしら。そう言えば、近くに福勝寺さん言うて節分にひょうたん出さはるお寺があります」

「みんなにひょうたん渡さはるのですか」

「ええ、小さいものらしいですけど」

「ああ、それは千生（な）りびょうたん言うて、一本の木に五百くらい生るのがあるんです。それやったら疊一枚分ぐらいの広さに一本植えて五百は生りますな。わたしの作ってるのは、小さいのから大きいので、色々あって、酒が一斗ぐらい入るこんな大きいもんもあります。細長いはや丸いのもありますけど、大きいもんやったら一坪に：：一坪いうたら疊二枚分の広さですけど、そこに一本植えて、葡萄の棚みたいになしっかかりしたもんがいりますにや、それに一つしか生らしたらあきません、いくつも生らしたらみんなあかんようになります。ほこぼこで硬うならへんのですわ。種をもらったり買ったりして作るんです。実ができたら口を切って水に浸けて、中を腐らしてから種を抜きますのやけど、腐ってるもんやさかい、そらあ臭い、くさい。からだにまで臭いが浸みついて、風呂にはいったかて取れしませんで。中を抜くのが大変なんですわ。水を入れては振って出すんですけど、口のとこへ種がひっかかったらもう出えしません、また水を入れて振って、振ってちよつとずつ、何日もかかって出すんです。みんな出してしまたら乾かして、こんどは栓を作るんです。それがまたなかなかうまいこと合いません、削りすぎたらごそごそになりますし、それが足らなんだら入らしません。手間ばっかりかかって百つくるのに十年かかりました」

「十年ですか」

「百作って、百が百とも形がちよつとずつ違います。長いやら、上下つりあいがとれて形のええのやら、いがんだのやら、なんせ自然がこしらえるもんでつきかい、ふたつとおんなじもんがあらしません。百が百、おん

なじもんなら一つあったらええんですさかい、だれにでもやったらいけど、それぞれに面白いのです。ほんで一つも人にやれしませんや、みんな階段のところにずらつとぶらさげてあるんです。いっぺん憲雄さんうちへ見にきてほしいと思てるんですけど、どうですやろ」

「そうですね、主人はどこへも行かへんひとで、權家さんへお経に行くほかはどこも出掛けはらへんです。ほんまにいっぺん寄せてもらわはるとよろしいのにね」

「わたしもあんまり出えへんですけど、京都駅の方へは時々いってます。駅の近くに紐をやってる友達があるんです」

「組紐ですか」

「そうそう、いろいろな紐をこしらえたり、結んだりするんです。これも兵隊仲間で、その人のとこへ紐を習いに行ってたんです。紐やら結び方やら習うて、ひょうたんに、みんな、それぞれ掛けましたで」

「なかなかのものですな。ひょうたんは赤い色をしたのがありますけど、何か塗ってあるんですか」

「いや、何も塗らんでも年が経ったらあんなふうに、かってに赤うなってくるんです」

「そうなんですか、自然と赤うなるんですか、それで、お酒を入れておくと浸みこんで光ってくるということですけど、やっぱりお酒をつけて磨くとかしはるんですか」

「いいえそんなことはせえしません、酒て入れんでも長いこと経ったら磨くだけで光ってきよるんです。わたしはちよつとニスを掛けたりしたのもありますけどなあ」

「へえそうなんですか：：」

「この頃は毛筆をやってます。これはなかなか上手になりませんなあ。もうだいぶやってますにやで、やっぱりこれも、ひょうたんに字を書いたろと思て始めたんですけど、紙とちごて、ひょうたんにはうまいことのりませんわ。ほんまに憲雄さんにいっぺんうちへ来てほしいんですけどなあ」

「またそう言うときます。めったに出掛けはらへんのに、たまたま今日は留守で、せつかく来ていただいたのに、お目に掛かれんと惜しいことでした」

「いま菊を始めましたんや、こんど来る時は、菊を持って来ますわ、この玄関へでも置いてもらたらいいんです：。そうですね、兵隊はわたしら楽なもんでした。なんにも苦しいことなんてなかったなあ。わたしは何もせなんださかい、憲雄さんは『おまえは怠け者やったなあ』て言わはるかもしれません。三べんも兵隊に行きましたんやで」

Kさんは、ひょうたん談義を終わって、兵隊時代のことを思い出したのか、ため息のようにつぶやいて、ゆっくりと腰をあげ、帰って行った。

志賀直哉に「清兵衛と瓢箪」という短編がある。

清兵衛は十二歳で未だ小学校に通つてゐる。彼は学校から帰つて来ると他の子供とも遊ばずに、一人よく町へ瓢箪を見に出かけた。そして、夜は茶の間の隅に胡坐をかいて瓢箪の手入れをして居た。手入れが済むと酒を入れて、手拭で巻いて、罐に仕舞つて、それごと炬燵へ入れて、そして、寝た。翌朝は起きると直ぐ

彼は罐を開けて見る。瓢箪の肌はすっかり汗をかいてゐる。かれは厭かずそれを眺めた。それから叮嚀に糸をかけて陽のあたる軒へ下げ、そして学校へ出かけて行った。

この小説を思い出して、Kさんに、酒で磨くのかとたずねたけれど、そんなことはしないようだった。清兵衛は町で見かけた爺さんの禿頭を瓢箪だと思ふほどの凝りようだったから、町で、瓢箪を下げた店といえれば必ずその前に立ってじっと見たということである。

わたしが時々買物に行く北野の公設市場の向かい側に、中立売通りから六軒町通りへ斜めに抜ける狭い通路があり、そこに古くから、建具屋などが軒を連ねている。並びの二軒目に骨董屋があつて、いつも同じような品物がきれいにはたきをかけられてあることを知っていた。その前に立ってみると、のぞかなくても店はむき出しなので、ほとんど全部の品物が見える。今までは気がつかなかったが店の左上の方に片寄せて、大小、丸いの細いの、ひょうたんがまとめて下げてあつた。よく集めてあるものだと思つて眺めていたが、Kさんが言ったような酒が一斗も入る大きいものは一つもなかった。十五センチくらいのものからいちばん大きいものでも四十センチくらいだと思つた。何か色が塗つてあるとしか思えないような、不透明なものもあつた。数えてみると、約二十五個だつた。Kさんのひょうたんは、これの四倍あることになる。

清兵衛は十ほど持っていたが、皮つきのものを買つて、その口を切るのも、種を出すのも、栓を作るのも独りでやったという。

彼は古瓢には余り興味を持たなかつた。まだ口も切つてないやうな皮つきに興味を持つて居た。しかも彼

の持つて居るのは大方所謂瓢箪形の、割に平凡な恰好をした物ばかりであつた。

ある日、町の裏通りで店を出している婆さんが、干柿やみかんといっしょにひょうたんを二十個ばかり下げているのに出会つた。

「ちよつと、見せてつかあせえな」と寄つて一つ一つ見た。中に一つ五寸ばかりで一見極く普通な形をしたので、彼には震ひつきたい程にいいのがあつた。

彼は胸をときどきさせて、

「これ何ほかいな」と訊いてみた。婆さんは、

「ぼうさんちやけえ、十銭にまけときやんせう」と答へた。

「そしたら、屹度誰にも売らんといて、つかあせえなう。直ぐ銭持つて来やんすけえ」くどく、これを云つて走つて帰つて行つた。

その後、清兵衛は、この瓢が離せなくなって、学校へも持つて行くようになる。しまいには時間中でも机の下でそれを磨いていることがあつた。修身の時間に見つかつて取り上げられてしまうと、彼は青い顔をして家へ帰り、炬燵に入ってぼんやりとしていた。そのことが父親に知れ、もともと清兵衛の瓢いじりをにがにがしく思つていた父親は、怒つて清兵衛を撲りつけ、柱に掛けてあつたひょうたんをみんな割つてしまった。

学校で取り上げられたひょうたんは、教員がきたない物でも捨てるように小使にやり、小使が骨董屋に持つて行くと、清兵衛のひょうたんは五十円で売れたから、小使は教員の四ヶ月分の給料をただ貰つたようなものだった。

た。その上に骨董屋は清兵衛のひょうたんを地方の豪家に六百円で売りつけたというのである。さすが骨董屋は本物を見る目を持っていたのだろう。そして儲けるのにも抜け目がなかった。

この出来ごと以来、清兵衛はひょうたんをやめて、絵を描きはじめ、また夢中になっているという。天才は、自分の作ったものの評価などに頓着しないから、そのよさを見つけた人がすぐれていた場合にかぎり、天才が育つことになる。清兵衛が絵に熱中しだしても、また父親は叱言をいはいじめた、というところで小説は終わっている。何をしてもその芽を摘みとることばかりに熱心な父親に、作者はどのように言いたかったのだろうか。本物の天才ならいくら摘まれても、悠然と伸び上がってきて、決してしぼんでしまったりはしないものだろうかという気がするが、天才が育つためには、どうも天才だけでは駄目なようである。

Kさんの百個のひょうたんを、一度眺めてみたいと思う。十年かけて、種から育てたひょうたんが百個、組紐を結んでずらりと掛けてあればやはり壮观だろう。

一度見に行ったら、と主人に言ってみたが、ひょうたんにはあまり興味がなさそうだった。わたしが見たところ、天才の美を見抜くような鑑識眼はないから無駄である。そのうち歳月という、人を越えた働きも加わって、Kさんのひょうたんの名をなす日があるかもしれない。こんど菊を持ってこようと言っていたから、もしそれを忘れなかったら、秋にはひょっこり玄関に立って、わたしたちを驚かせてくれるかもしれない。そうしたら、もう一度Kさんのひょうたん談義を聞きたいと思う。

シャーリプトラに呼びかけて釈尊の語る言葉は、さらに続く。

3-21. そこで、シャーリプトラよ、如来は、あの人が腕が立つのにその力を保留し、巧みな方便でその子どもたちをあの燃える家から逃げ出させ、逃げ出した後に優れた乗物を与えたのとちょうど同じように、シャーリプトラよ、如来・尊敬されるべき・正しく覺ったひとは、如来の知力と自信をもちながら、如来の知力と自信を保留し、巧みな方便の知により、屋根も庇も朽ち古びて燃える家さながらの三界から、衆生を逃げ出させるために、三つの乗物を示す。それは声聞乗と、独覺乗と、菩薩乗である。三つの乗物で衆生を誘い、こう告げる「あなたがたは、この燃える家のような三界で、つまらない色・声・香・味・触をよろこびとして求める。この三界で、あなたがたは五欲のたのしみとともなう渴愛に、焼かれ、熱せられ、焦がされている。この三界から逃げ出さない。声聞乗、獨覺乗、菩薩乗という、三つの乗物を手に入れるだろう。わたしはこのことを保証し、わたしはそれら三つの乗物を与えるだろう。三界からの出離のために精進しなさい」と。またこのように言っただけを誘う「ああ衆生よ、この尊とい乗物は、聖者によって稱讚され、大きな樂しみを具えるものだ。あなたがたは思うままに遊び、喜び、樂しむがいい。機能・力・覺道・禪定・解脱・三昧・平安によって大きな満足を受けるだろう。そして大きな安樂と歡喜を具えるものとなるだろう」と。

tatra śāripuṭra tathāgato yad(ṃ: tad)-yathā 'pi nāma sa puruṣo bāhubalikaḥ sthāpavitvā bāhubal-
 aṃ upāya-kausalyena tān kuṃārakāṃs tasmād ādīptād agārān niṣkāsayen niṣkāsayitvā ca teṣāṃ pa-
 ścād udārāṇi mahā-yānāni dadyāt evaṃ eva śāripuṭra tathāgato 'py arhan saṃyak-saṃbuddhaḥ tath-
 āgata-jñāna-bala-vaiśāradya-samanvāgataḥ sthāpavitvā tathāgata-jñāna-bala-vaiśāradyam upāya-k-
 auśalya-jñānen 'ādīpta-jīṛṇa-paṭala-śaraṇa-niveśana sadṛśāt traidhātukāt satlvānāṃ niṣkāśana-h-
 etos trīṇi yānāny upadarśayati yad uta śrāvaka-yānaṃ pratyekabuddha-yānaṃ bodhisatva-yānaṃ i-
 ti / tridhiś ca yānaih satlvāṃ | lobhayaty evaṃ caiṣāṃ vadati / mā bhavanto 'sminn ādīptāgāra-
 sadṛśe traidhātuke 'bhīramadhvaṃ hīneṣu rūpa-śabda-gandha-rasa-sparśeṣu / atra hi yūyaṃ trai-
 dhātuke 'bhīratāḥ pañca-kāma-guṇa-sahagalayā tṣṇayā dahyatha tapyatha paritapyatha / nirbhāva-
 dhvaṃ asmāt traidhātukāt trīṇi yānāny anuprāpsyatha yad idaṃ śrāvaka-yānaṃ pratyekabuddha-yān-
 aṃ bodhisatva-yānaṃ iti / ahaṃ vo 'tra sthāne pratibhūr ahaṃ vo dāsyāmy etāni trīṇi yānāny a-
 bhīyujyadhve traidhātukān niḥsaraṇa-hetoh / evaṃ caitāṃ | lobhayāmi / etāni bhoh satlvā yāny(ṃ:
 yānāny) āryāṇi c'ārya-prasastāni ca mahā-ramaṇīyaka-samanvāgatāni cākṛpaṇam etair bhavantaḥ k-
 rīḍisyatha ramisyatha paricārayisyatha / indrya-bala-bodhyānga-dhyāna-vinokṣa samādhi-samāpat-
 tibhiś ca mahatīm ratim pratyannbhavisyatha / mahatā ca sukha-saumanasyena samanvāgatā bhaviṣ-
 yatha ||

3-22. そこで、シャーリプトラよ、聡明な知性のある衆生は、世界の父なる如来を信受する。信受して、如来の教誡に、注意ぶかく、精進しようと、歩み出す。そのうち、他のひとの声を聞いて、従おうとする衆生なら、自分が完全な涅槃に入るために、四つの聖なる真理を覚ろうとして、如来の教誡に注意する。かれらは、声聞乗をもとめて三界から出離する、といわれる。それは、あの燃える家から他の処へ、子どもたちが鹿の車をもとめて走り出るようなものである。他の衆生は、師なくして得る知や、自制や、寂靜をもとめて、自分が完全な涅槃に入るために、因縁を覚ろうとして、如来の教誡に注意する。かれらは独覺乗をもとめて三界から出離する、といわれる。それは、あの燃える家から他の処へ、子どもたちが羊の車をもとめて走り出るようなものである。

tatra śāriputra ye sattvāḥ paṇḍita-jātiyā bhavanti te tathāgatasya loka-pitṛ abhiśraddadhanti / abhiśraddadhitivā ca tathāgata-śāsane 'bhijuyanta udyogam āpadyante / tatra kecit sattvāḥ p-
 ara-ghoṣa-śravānuṣaṃsaṇam ākāṅkṣamāṇā ātma-parinirvāṇa-hetoś catur-ārjya-satyānubodhāya tathāga-
 ta-śāsane 'bhijuyante / ta ucyante śrāvaka-yānam ākāṅkṣamāṇās tṛaidhātukān nirbhāvanti tad-y-
 athā 'pi nāma tassād ādīpāgarād anyatre dārakā mrga-ratham ākāṅkṣamāṇā nirbhāvītāḥ / anye sa-
 ttvā anācāryakaṃ jñānaṃ dama-śamatham ākāṅkṣamāṇā ātma-parinirvāṇa-hetor hetu-pratyayānubodhā-
 ya tathāgata-śāsane 'bhijuyante / ta ucyante pratyekabuddha-yānam ākāṅkṣamāṇās tṛaidhātukān
 nirbhāvanti tad-yathā 'pi nāma tassād ādīpāgarād anyatre dārakā ajaratham ākāṅkṣamāṇā nir-
 bhāvītāḥ /